

犯罪からの子どもの安全に関する考察

—— 小学生に対する危機遭遇体験調査を基に ——

宮田美恵子 (日本女子大学客員准教授)

要約:

子どもたちの安全な子ども時代が脅かされている。2005年、栃木県、広島県などで相次いだ子どもをめぐる犯罪被害事件を受け、全国で子どもの見守りパトロール隊が編成されるなど様々な対策が講じられてきた。しかし、子どもの周囲を守る大人の対策に囲まれながらも、子どもは見守りの目が消失した隙間、死角で被害に遭遇することがある。危機の“その時”子ども自身が自らを守る機知や身体的な力によって危機から離脱できたケースがある一方で、為す術なく被害に巻き込まれていった子どももいる。犯罪被害からの子どもの安全確保は家庭が中心となり、地域の大人が学校などと連携して子どもたちの暮らす環境の点検整備などを行うことにより確保されるものであることは言うまでもない。しかし、こうした大人による見守りにとどまらず、子ども自身にも危機離脱のための力の体得が必要だと考えられることから、本論では子どもの危機への対応力を中心に考察した。

実際、小学生を対象とした犯罪の前兆行為等体験調査から、児童が通学路で一人の時に危機に遭遇し、かつ自らを守るための行動を起こすことができなかつた児童はおよそ3割存在することが判明した。したがって、大人による見守り活動や言葉による注意喚起、知識注入に加え、子どもの発達にしたがって、実際に子どもがどう行動すればよいのかを学ぶ安全教育の必要性が言えよう。

キーワード: 子どもの安全・安全教育・前犯罪・不審者・声かけ事案

1. 調査の枠組み

(1) 目的と先行研究

本調査は、新潟県上越市内の公立小学校を対象に、小学生児童の前犯罪被害状況等の実態把握を中心に犯罪被害対策のための基礎データ収集を行った。

この調査が企画された背景には、2006年内閣府「子どもの防犯に関する特別世論調査」において「子どもの犯罪被害に不安を感じる」人が74.1%にも及ぶなど、保護者や教師等の不安が高く実態把握のニーズがある。にもかかわらず、警察庁による刑法犯被害認知件数統計は存在しているものの、とりわけ低年齢な児童への前兆行為体験調査はリテラシー発達状況や認識の

問題などがそれを困難にさせている現状がある。

犯罪からの子どもの安全確保を考える時、何よりも前兆段階で危機を回避することが重要であり、実態把握に困難が伴うとしても、対策を講じるために現状に近づく工夫を繰り返し、困難を乗り越える試みに寄与したい。

前兆行為等体験調査は、先行研究として2000年中村攻、2006年 科学警察研究所（以下、科警研）などによる調査が存在する。中村の調査は、4年生以上の児童を対象とした大規模な全国調査であり、都市部と農村部における被害体験の違いが明らかにされ、被害場所の特性から大人による点検整備の必要性が示さ

■表1: 子どもが誰といたか (度数)

被害内容	子どもが誰といたか			
	自分1人	子どもだけ	子どもと大人	合計
①変な人につきまとわれる(前兆的行為)	22	20	3	45
②車に乗せられそうになる(緊急的犯罪行為)	9	4	0	13
③変な人に体をタッチされる(緊急的犯罪行為)	4	8	5	17
④変な人にじーっと見つめられる(前兆的行為)	70	60	20	150
⑤変な人に体を見せられる(緊急的犯罪行為)	0	4	3	7
⑥変な感じの人に声をかけられる(前兆的行為)	55	81	9	145
⑦変な感じの人に追いかけられる(緊急的犯罪行為)	22	14	1	37
⑧おどかしで物やお金をとられる(緊急的犯罪行為)	1	3	0	4
⑨急に大声でどなられる・おどかされる(緊急的犯罪行為)	26	45	4	75
⑩その他	21	58	6	85

れた。後者の科警研による調査は1地域に焦点を当て、5つの小学校の全学年児童に7行為の被害経験をたずねたもので、ホットスポットや被害情報の伝わりやすさなどが明らかとなるなど、いくつかの興味深い新たな事実が導き出された。

(2) 本調査の意義と行為の分類

これら先行研究を受け、本調査では、社会を震撼させた子ども被害事件の現場が、2002年頃から東京などの大都市圏から地方都市圏へと移行していること、もしくは都市の中心地よりも、むしろその周縁部で発生する傾向が見られることに注目し、調査対象地を(4)のように定めた(注1)。

対象者は、警察庁統計において小学生の中でも年齢の低い低学年児童への犯罪被害が多く見受けられることから、こうした段階の児童も調査対象とした。

調査行為に関しては、科警研調査では行為を7行為に分けているが、本調査ではより詳細な実態把握のため、以下の点を考慮して10行為に分類した(表1)。

それを科警研調査の分類に照らしてみると、同研究所では行為a「追いかけ」には「追いかけられる・後を付けられる」が含まれ、b「誘い」には「声かけ」と実際に「連れて行かれた」が含まれ、またc「暴力」には「手をつかまれたり、体に触られた」が含まれている。これらに対し、本調査ではaについては「追いかけ」と「後を付けられる」が分割されている。bでは言葉による誘いかけの段階と実際に「連れて行かれそうになる」行為が切り離され、さらにその手段として車使用による行為を独立させた。cにおいては、「体に触られる」は暴力の中でも性暴力や痴漢を思わせることから本調査ではこれらの行為も独立させている。

後述するように子どもの前兆把握調査は困難を伴うことから、現段階では様々な視点からのアプローチによる試行が繰り返される意義があると考えられ、本調査独自の視点も前兆調査への一助にはなるのではないだろうか。また、今後とりわけ児童の身近に日常的に引き起こされる事件への発展可能性を有する「前兆行為」、いわゆる「声かけ」等の体験と、刑法犯被害認知件数等との相関を明らかにするための基礎データとなり得る期待がある。

(3) 調査対象児童

対象者は年齢階層の異なる児童の全体像を把握するため、小学校低学年=2年生(1152名)、中学年=4年生(1357名)、高学年=6年生(1266名)をそれぞれ代表とし小学生児童の発達段階の違いをほぼ網羅した。調査児童数は3775名、このうち男子児童50.8%、女子児童49.2%とほぼ同じ割合であり、学年別にも偏りのない構成である(表2)。

(4) 調査方法・期日および調査票

調査対象地は首都または首都圏以外の地方都市とし

て新潟県上越市にある市立小学校全54校を調査対象と定め、学級全てで調査票を基にした留め置き調査法によって、学級単位で学級担任の指導の下に実施された。ただし、予め調査趣旨を説明し、希望しない児童は含まない。また児童へは何も回答せずに提出しても構わないことを周知した。

配布・回収にあたっては児童のプライバシー確保のため無記名で行われ、かつ回収時にはランダムに袋に入れる方法でなされた。期日は2007年10月である。

調査票は、低学年児童はリテラシーの問題から質問・回答文の代わりに可能な限りポンチ絵が用意され、それに○印をつける方式の調査票が作成された。また、質問文も低学年向け調査票では中・高学年用のそれと質問の意味が変わらない限り平易な文章とした。

その他、回答に際しては児童のリテラシーを補う他に、前兆行為に対する判断に伴いがちな児童の勘違いや思い過ぎを可能な限り除外するために、学級担任の説明により質問の内容や危機遭遇状況説明、回答方法などへの客観的な補助がなされた。それによって児童が加害行為者や行為を選別するにあたり、少なからず役立ったと考えられる。

(5) 子ども被害の取り扱い

(2)の分類から児童の遭遇する前兆行為のうち、犯罪に他ならない危機的状況の切迫した体験を「危機被害遭遇体験」、危機被害体験ほどは切迫した事態ではない前兆的な行為を「前危機被害遭遇体験」に分け10の状況を児童に示し、「あなたは、この1年間で次のようなことがありましたか」という遭遇体験への回答を求めた。

なお、分類した行為のうち「つきまとい」は軽犯罪法およびストーカー行為等の規制等に関する法律(以下、ストーカー規正法)で法定化されているものの、後者が対象とするのは①ストーカー行為と②つきまとい等であるが、つきまとい自体は犯罪ではなく、そうした行為が同一者に対し悪意をもって反復してなされ不安や恐怖を感じさせることとされている。しかし成人と異なり、とりわけ年齢の低い児童にとって、こうした行為が悪意あるつきまといであるのか否かの判断と、不安や恐怖などを関連付けて説明する認識や表現力などが未成熟であることが考えられ、ストーカー規正法で取り締まるのには困難を伴う。そのため現状では子どもへの単発のつきまとい等行為も含め前犯罪としてカウントされているケースが多く、年齢の低い子どもと成人では、つきまとい行為の扱いが異なることも現状把握の困難さを物語っている。以上のことから本調査では「つきまとい」を前犯罪に含めた。

(6) 定義

論者のヒアリング調査によれば、警察庁では「不審者」や「声かけ事案等」を定義づけてはいない。それ

■表2：危機被害遭遇体験と前危機被害遭遇体験

	危機被害遭遇体験			前危機被害遭遇体験			
	遭遇体験無し	1回以上あり	合計	遭遇体験無し	1回以上あり	合計	
2年生	度数	1110	42	1152	1013	139	1152
	行のN%	96.4%	3.6%	100.0%	87.9%	12.1%	100.0%
4年生	度数	1271	86	1357	1172	185	1357
	行のN%	93.7%	6.3%	100.0%	86.4%	13.6%	100.0%
6年生	度数	1213	53	1266	1152	114	1266
	行のN%	95.8%	4.2%	100.0%	91.0%	9.0%	100.0%
合計	度数	3594	181	3775	3337	438	3775
	行のN%	95.2%	4.8%	100.0%	88.4%	11.6%	100.0%

は子どもの安全を考える時、認知能力や判断力の未成熟さなどを勘案し、「不審者」に相当する人や「声かけ事案等」の対象となる行為に対し、限定的な先入観を抱かせることによって油断を招いたり、本来犯罪的行為であるにもかかわらず定義に該当しない事案を排除することへの懸念がある。まずは訴えの全てを汲み取り、そこに犯罪性があるのか否かを検証しようという観点によっていると考えられる。

「声かけ事案等」について、例えば埼玉県においては「18歳以下の男女に対して、犯罪行為に至らない前兆段階の『声をかける』『手を引く』『肩に手を掛ける』『後をつける』等の行為。善良な市民による悪意のない行為でも、被害者の主観により不安を覚えた事案も含まれる」としているが、あくまでも目安、例示であって広義に捉えられているのが実情である。よって識者や研究者らによるいくつかの見解はあるものの、それらも同様に捉えるのが相応しいものと考えられる。

(7)「変な人」という表現の採用について

本論で対象としている子どもに危険をもたらす可能性のある人を表す言葉として「変な人」を採用した。一般的には「不審者」「変な人」「あやしい人」「危険な人」「危ない人」など様々な表現が用いられている。

子どもの立場から、こうした10の行為をもちかける人をどのように表現するかの事前ヒアリング調査において、「変な人」という回答が多く、次いで「変態」（正常でない状態、変態性欲、広辞苑第5版による）と表現する児童が見受けられた。

毎日の登下校をスクールガードに見守られ、学校や地域で防犯指導が行われるようになった昨今、子どもたちの中にこうした行為者への意識が浸透してきている背景から、10の行為を行う人をイメージする時「変な人」が児童にとって馴染みやすい言葉として用いられているものと考えられる。実際、本調査自由記述欄にも同様の言葉を用いた書き込みが見られたことを追記しておきたい。

したがって、児童に10の行為者をイメージさせる時「変な人」を用いることにより、児童が記憶をたど

りやすい相応しい表現であると判断するに至った。

2. 調査の結果

(1) 危機遭遇体験の発生状況

① 6人に1人強の児童が犯罪あるいは前兆的な行為による危機に遭遇（全危機被害遭遇体験）

全10行為の内、1つ以上の行為を体験した児童が何人いるかを計算した（以下、累積計算）。累積計算においては、危機被害と前危機被害を同時に体験した場合、遭遇体験児童1人として計算している。

全危機被害遭遇体験の累積計算の結果、児童の16.2%が1年間に1つ以上の犯罪的あるいは前兆的な行為に遭遇していることが判明した。

学年別に見ると、4年生が20%と最も高く4年生児童の5人に1人が何らかの体験をしている。次いで2年生が15.5%、6年生が12.9%となっている。こうした傾向には男女の性別による大きな差はみられない。

② 約20人に1人の児童が犯罪的危機に遭遇（危機被害遭遇体験）

全危機被害の行為の中から「車に乗せられそうになる」といった犯罪行為に相当する危機被害遭遇体験の累積計算では、児童の4.8%が1年間に1つ以上の犯罪行為に遭遇していることが判明、この割合には男女による大きな差はない（表2）。

学年別に見ると4年生が6.3%と最も高く、次いで6年生が4.2%、2年生が3.6%となっている。注目されることは、低年齢な2年生児童でも年間に3.7%が1行為以上の犯罪被害に遭遇していることである。性別による大きな差はない。

③ 8人に1人の児童が犯罪の前兆的行為に遭遇（前危機被害遭遇体験）

前兆的行為の「つきまといられる」など被害遭遇体験の累積計算では、児童の11.6%が1年間に1つ以上の前兆的行為に遭遇していることが判明した（表2）。

学年別に見ると、4年生が13.6%と最も高く、次いで2年生が12.1%、6年生が9%となっている。こうした傾向に大きな性差はない。

④被害遭遇場所とその時、誰といたか

全危機遭遇体験をした場所とその時、児童はどのような状況だったのかを尋ねた。

遭遇場所は多い順に通学路が53.4%、公園12.2%、駐車場あるいは自転車置き場11.4%、にぎやかな繁華街7.7%と続く。学年別では通学路が2年生23%、4年生58.7%、6年生63.2%である(表1)。遭遇体験をした時児童が誰といたかについて、自分1人だった37.2%、子ども複数53.2%、大人と一緒に9.6%で大きな男女差はない(4・6年生のみ)。

(2) 前兆行為いわゆる“声かけ”と“緊迫した危機”との相関

児童が遭遇した全危機遭遇体験の数値(16.2%)から、前危機遭遇体験した児童(11.6%)の発生(=「発生確率」)を危機被害遭遇体験(4.8%)と比較すると、前兆的な被害に遭遇する児童の発生状況は緊迫した犯罪行為体験の2倍強であることが明らかとなった。

(3) 何もできなかった児童が3割

全危機遭遇体験した際、児童がどのような行動を取ったかへの回答を求めた。

何か行動できた児童のうち、どの学年でも「走って逃げた」が多く、そのうち2年生は51%と最も多く、次いで4年生が41.5%、6年生38.2%である。学年別では、2年生は「お店やお家に駆け込んだ」13.2%、4年生では「キッパリ断った」が多く、4年生は12.5%、6年生では14%の児童が回答している。一方、2年生で最も多かった「お店やおうちに駆け込んだ」は、4年生では9.1%、6年生では1.3%に過ぎない。

他方、「何も出来なかった」児童は2年生では33.8%、4年生で25.2%、6年生で26.8%存在し、危機に遭遇した児童は走って逃げたりキッパリ断っているものの、その時、何もできない状況にあった児童が3～4人に1人いる。学年別に見ると、2年生男子46.1%女子21.3%、4年生男子24.6%、女子25.2%、6年生男子18.8%、女子32.3%と4年生ではほとんど差が見られない。しかし、低学年の2年生では男子は女子の2倍以上が何もできなかった児童が存在し、高学年の6年生では順位でいえば男子と女子が入れ替わっていることに注目される。本調査の設問に対する児童の解答には性差がほとんど見られなかったものの、「危機のその時の対応」に関してはこのような性差が見られることは、低年齢の子どもの成長発達段階における性による特性との関わりがあるのではないかと、という仮説も湧き上がる。これは今後の課題としても注目すべき特徴であるといつてよいであろう(表3)。

3. 考察～児童危機遭遇体験等調査の結びに代えて～

本調査によって明らかとなった地方都市周縁部ににおける児童の危機遭遇体験の実態から2点述べたい。

1つは「およそ3割の児童が何も対応できなかった」についてであるが、前兆行為遭遇時、何らかの対応ができたと回答した児童のうち、低学年児童であっても51%が走って逃げることができたり、ブザーで報せ(6%)、機転を利かせて「お店やお家に駆け込んだ」(13.2%)という結果から、おおむね大人である不審者に対し、子どもが力弱いだけの存在ではないことがわかる。

このような場面での子どもの機知や身体能力とは、子どもが不審者と格闘したり捕えるのではなく、危機を周囲の人に「伝え」、助けを「求める」ことを指す。そこにはコミュニケーション能力や、媒介させるブザーなどの手具の操作、「くち」という身体器官を用いて「伝える」力が必要であり、もしくは身体能力である「走る」ことによってその場から離脱し、自らの安全を確保する力が中心となる。大人にはそれを受け止められるコミュニティ創りが求められよう。

実際に警察庁が捉えている危機から離脱し、被害を未然に防いだ子どもの例や、本調査に見られる1人の時に何らかの手段によって離脱できたおよそ70%の児童が存在していることは、緊急時想定体験型安全教育が事前になされることで、何もできなかったおよそ30%の児童にも危機への対応力を養う可能性を垣間見させる。

2つ目は、児童の被害遭遇は子どもが1人の時だけでなく、子ども複数の時53.2%、大人と一緒にでも10.2%あるが、緊急的犯罪行為である「車に乗せられそうになる」は、子ども1人だけ69.2%・子ども複数30.8%だが、大人と一緒にでは0%である(以下同様の順番で記述。4、6年生のみ)。

それに対して「体にタッチ」はそれぞれ(23.5・47.1・29.4%)、「体を見せられる」(0・57.1・42.9%)であり、大人と一緒にの時でも痴漢やわいせつ行為に遭遇している状況がある(表1。4、6年生のみ)。

大人と一緒にの場合の「体を見せられる」は「いたずら」や「からかい」といった意味合いも含まれると推察されるが、こうした段階から子ども1人の状況下にもたらされる犯罪への移行は、本調査で示された危機被害遭遇体験児童の発生確率4.8%に対し、前危機遭遇体験児童の発生確率は11.6%、つまり2倍強という関係性を示している。

すなわち、比較的軽微な前兆的行為から緊急的犯罪行為、さらには犯罪へと進行し、絞り込まれていく構図の各段階以前に児童が遭遇を断ち切る、もしくは被害を最小限に留めるために子ども自身に対応力が求められ、それへの対策として緊急時想定型の安全教育への期待がある。

以上、本調査からは、子どもの前犯罪遭遇実態把握の困難さを背景に、前犯罪が犯罪へと進行する可能性

■表3： その時の行動

			その時の行動									
			①走って逃げた	②大きな声で叫んだ	③ブザーをならした	④キッパリ断った	⑤子ども110番の家にかげこんだ	⑥お店やお家にかげこんだ	⑦近くにいた人に助けを求めた	⑧何もできなかった	⑨その他	合計
2年生	男	度数	29	1	2	6	1	10	5	35	0	76
	女	度数	48	2	7	6	1	10	4	16	0	75
	合計	度数	77	3	9	12	2	20	9	51	0	151
4年生	男	度数	58	2	0	19	1	10	1	33	41	134
	女	度数	52	2	2	14	4	14	3	33	44	131
	合計	度数	110	4	2	33	5	24	4	66	85	265
6年生	男	度数	29	2	1	6	0	1	1	12	24	64
	女	度数	31	0	1	16	0	1	0	30	31	93
	合計	度数	60	2	2	22	0	2	1	42	55	157
合計	男	度数	116	5	3	31	2	21	7	80	65	274
	女	度数	131	4	10	36	5	25	7	79	75	299
	合計	度数	247	9	13	67	7	46	14	159	140	573

のある緊急事態に何もできなかった児童に危機回避もしくは危険離脱のための「伝える力」「求める力」となる緊急時のコミュニケーション能力など「身体能力」を高める安全教育の必要性が求められるということができよう。

※本稿で用いたデータは、「小学生危機被害遭遇体験調査」(2007年度文部科学省 資質の高い教員養成 GP(日本女子大学、研究代表：清永賢二日本女子大学教授、論者は同研究委員)の一環としてなされたものである。清永教授をはじめ関係各位には、データの使用に関して特段のご理解を戴いた。ここに衷心より謝意を表すものである。

注1) 清永賢二,安全神話の崩壊と学校・地域社会関係の再構築. 何がどうなっているのか(子どもの安全と学校・地域社会,公開シンポジウム,日本教育社会学会第58回大会)

〈文献〉

清永賢二,宮田美恵子他,文部科学省 GP 研究報告(日本女子大学) 2008

埼玉県警察,子どもを犯罪から守ろう,埼玉県警察ホームページ <http://www.police.pref.saitama.lg.jp/jyouthoukan/codomo/ninti.htm>

島田貴仁,子どもの犯罪被害実態と防犯対策を考える.予防時報.vol232pp.8-13.2008

千葉県警察,子どもを犯罪から守りましょう!,千葉県警ホームページ http://www.police.pref.chiba.jp/safe_life/juvenile_delinquency/save_children/

内閣府,子どもの防犯に関する特別世論調査.2006

中村攻,子どもはどこで犯罪に遭っているかー犯罪空間の実情・要因・対策.晶文社.2000

日本子ども学会NEWS

第7回子ども学会議学術集会のお知らせ

テーマ「子どもサポートの統合—危機にある子どもたち—」

子どもたちの世界は、子どもを取り巻く教育・医療・保健・福祉等、多様な領域の専門家が連携をとらなければ決して良くありません。領域を超えた知を結集することで、子どもへの理解を深め、危機にある子どもたちを救う方途を探ります。

【開催日】 2010年10月2日(土)、3日(日)

【会場】 川越市民会館(埼玉県川越市郭町1-18-7)

【プログラム(予定)】

■特別講演1

サラ・フリードマン(元NIH・NICHD研究員)

■特別講演2

高木裕三(東京医科歯科大学歯学部教授)

■シンポジウム

- ①「発達障害—自閉症をめぐる」
コーディネーター：平岩幹男(Rabbit Developmental Research)
- ②「子どもの貧困を根絶していくために」
コーディネーター：木下真(日本子ども学会事務局長)

- ③「子ども虐待—子どもの医療関係者による虐待早期発見と予防」
コーディネーター：峯真人(峯小児科医院、埼玉県小児保健協会会長)
- ④「子どもの傷害予防に取り組む」
コーディネーター：山中龍宏(緑園こどもクリニック)
- ⑤「子どもをタバコから守る」
コーディネーター：高橋裕子(奈良女子大学教授)

■その他の予定

- *教育講演、ランチオンセミナー、懇親会
- *親子の歯磨き指導会
- *ポスター発表：4月中旬より受付を開始します。
詳細は「日本子ども学会ホームページ」等でお知らせします。

大会委員長：渡部 茂、準備委員長：鈴木 昭

明海大学歯学部形態機能成育学講座 口腔小児科学分野
〒350-0283 埼玉県坂戸市けやき台1-1 ☎049(279)2742